



ハンチントン西壁
1976年6月24日登頂
大阪府勤労者山岳連盟隊
撮影・提供・織田博志

これまでの登山・労山…そしてアルパ インクライミングのことなど No.7

くすのき山遊会 織田博志

山のリスク…内在する危険と ‘その時その場所にいる、ということ

内在する危険と自然状況による遭難

最近よく ‘山のリスク、’ という言葉を見聞きします。多くの遭難事故に言えることは ‘危険は私たちに内在している、’ ということだと思います。

それに対して、自然状況に起因する事故は、時として大遭難になります。'14年9月28日の御嶽山の水蒸気爆発は63名もの命を奪い、負傷者は69人と

いう遭難でした。

3年前の4月のエベレストのベースキャンプを襲った大雪崩は、27人の命を奪いました。‘その時、その場所にいる、’ と、避けることができない事もあります。このように、噴火・地震・大雪崩・氷塊・岩石・土石などの大崩落は ‘山での大きな脅威、’ です。

アルパインクライミングで経験した自然の脅威

昨日来た時は何でもなかった道路が、大量の土砂・岩石に覆われ、ガードレールも折られ飛ばされていました。そういうことが、労山の仲間たちが通う道場、不動岩で3回、小豆島吉田の岩場で2回ありました。そちらも復旧が即日だった

のには、理由がありました。上流に水源地のダムがあったからです。

岩盤が風化により崩れる、大雨による土石流失、怖いですね。注意していても道路標識の ‘落石注意、’ と同じで、通過しなければなりませんから ‘運しだい、’

となります。

穂高岳屏風岩第1ルンゼの岩崩れは、多くのクライマーを埋めて悲惨な事故でした。東壁登攀中に地震にあい、眼前の岩場が一瞬膨らんだように感じ、ドーン、と響きました。静寂の後、落石の音があ

たりを覆いました。春の劔岳平蔵谷を下降中、前劔からの大雪崩には肝を冷やしました。源次郎尾根平蔵谷側の雪面が大崩れし、大量の土砂、岩石とともに谷から出合まで、雪面を埋めつくしたことがありました。

海外で経験した自然の脅威

危なかったなあと記憶に強く残っているセラック大崩れがあります。アルプスのガイドでミディからタキュル、モンモディを縦走してモンブランに登頂山行の時でした。モンブランから下降中、グランミュレ小屋へ行くまでの氷河でのことです。クレバスを飛び越したり、スノーリッジを伝ったりと氷河の状態は悪くなっていました。もう2日もしたら通れなくなるねとゲストと話しながら下りました。3日後、マッターホルン・ヘルンリ稜のガイドを終えてツェルマットに戻ると、モンブラン・セラック大崩壊9人死亡、のニュース。私たちが下ってきた氷河でした。その時その場所、ということ強く思いました。

ネパール・ヒマラヤ、ゴジュンバ氷河では、アイスホールの迷路になった氷河を登り、上部ヘルートを伸ばしていました。キャンプへ戻るため下っていくと、今朝通ったスノーブリッジが大崩壊していました。1ピッチほど空中にロープが対岸に続いていました。どうしようか？これしかないねと私h1ピッチ、ラッペルをして崩れた氷の塊が巨大なクレバスの中で作る不安定な部分に到着しました。ザイルを結び合っても危険極まりのない崩れた氷塊を伝い渡り対岸に至りました。氷壁を1ピッチ登り抜け出しました。これでキャンプに戻れると安堵しました。

幸運では言い表せない感覚

このような体験をしていくと、崩壊した時、にその場所、にいなかった事が何か「幸運だった」という言葉だけでは納得できないのを感じます。表現するのは難しいのですが言葉では「守られた」と、感じました。

アルパインクライミングを長く実践していますと登攀技術や体力、知識など個人の能力向上だけでは解決できないものを感じています。(続く＝次回は「修行し鍛練を続け培われる実力…第六感」です)。